

〈解答例＝内倉〉

小説家である筆者は、正確を期する場合や意味の取り違えを防ぐ場合以外は、基本的に辞典による語源検索をしないという。それは、本来の意味にこだわるあまり自分の書きたいことばが使えなくなるおそれがあるからだ。辞典を用いることで感じた違和感を通して、筆者は、辞典に基づく、最も端的に表現できる語句は、小説の文章に不向きであるという真理に思い至った。

もちろん、原書の意図を正確に伝えることを目的とする翻訳などでは、辞典を引くことが必須の作業となるだろう。また、他者との意思疎通を目的としたことばのやりとりでも原義に基づくことばを選ばなければならない。なぜなら、自分のことばが他者のことばであるとは限らず、ことばが相手に正確に伝わらないことも起こりうるからだ。本来、辞典というものは、ある事柄を他者と共有するためのものなのである。

しかし、ことばはコミュニケーションの道具であると同時に、自分らしさの表現手段でもある。表現したいことを伝えるためのことばは、その人にとって必然のことばであって、必ずしも辞典のことばではない。そうでなければ、真に自分のことば、自分の文章とはならない。そういった意味で、小説の面白さは、ストーリーのそれとは別に、辞典に依らない作家特有のことばにあると言えるのだ。

したがって、辞典などというものがなかった時代には、極めて個人的なことばが選ばれ、その人でなければ成せない文章が書かれていたことが想像できる。辞典がない状況では、今日の私たちが置かれている状況と比べて、正確に意図が伝わりにくかったかというところではない。そこでは自分のことばを大切にすると同時に、他者の個人的なことばを尊重する姿勢があったのではないだろうか。